苦しみが子どもを鍛える

昔はかなり裕福な家でも、親は毎日生活に追われていて、子供のことを思いやりたくても、その余裕がほとんどありませんでした。そのため、子供たちは自分の頭を使って考え、自分の体を使って物事を処理しないわけにはいきせんでした。

それで、頭を使うから頭の働きが活発になり、体を使うから身のこなしが上手になり、体も自然と丈夫になりました。ただ食物が粗末だったので、今の子供のようには見かけが良くありませんでしたが、暑さ寒さに強く、ねばりのある強靭さがありました。

今の子供は、暇の多い親たちから愛玩物のように扱われて、ちょっと面倒なことは親が見かねて直ぐに手を貸してやるものですから、子供は、自分の頭を使い手足を使って働くことが極度に少なくなりました。だから、いざという時には頭も手足も働かないひ弱な人間になってしまったのです。

しかし、今の子供たちにとって最も不宰なことは、頭や手足の働きの悪いことよりも、苦しいことに耐え忍ぶ精神の足りないことだと思います。

この世の中には、自分の思い通りになることの方が少ないので、いやなことでも回避せず、これに立ち向かって行かなければならないことが多くあります。そのため、苦しいことに耐え忍ぶ精神に欠けていたら、成功することは勿論、社会を生き抜いて行くことがむずかしくなります。

親というものは、わが子が苦しんだり困ったりしているのを見るのがつらいものです。だから、親がわが子の苦しみや悩みを引き受けてやりたく思うのは無理もないことだ、と思います。しかしながら、それは“苗を引っ張る”行為で決して子供のためになりません。

親が“最悪の教師”に陥りやすいのはこのためです。子供の能力は、子供自身がその苦しみ、悩みと戦い、これを克服して初めて養われるのですから、それを親が肩代りしてやっていたのでは、いつまでたっても子供の力がつきません。親はこのことに思いを致し、手を貸したい気持をおさえることが必要です。

「かわいい子には旅させよ」という諺は、親がわが子の苦しみ、悩む様を黙って見ていることが出来ないものだから、それで作られた諺だと思います。子供が旅先で遇う苦しみや悩みは親には見えません。その見えない所が良いのです。

幼稚園教育の家庭教育にない良さの一つはそこにあります。親の目の届かない所で、自分の思い通りに行かない生活を余儀なくされるところが旅とよく似ていて、それが子供のために良いのです。

ところが、幼稚園生活のつらい所を、子供から根掘り葉掘り聞き出して、子供に手を貸そうとする親があります。これでは子供を幼稚園に通わす意味が半減してしまいます。“艱難汝を玉にす”と思い、子ども自身にそれを克服させることが肝要です。